ている。手だけが巾を利かせる世紀は終っていない。

手はX氏の前に立ちはだかっている。

翌日、いつもの地下鉄の出口で、切符を受けとる駅員の手がまぶしく光った。左手に、白い繃帯があった。2人の視線が交わった。親しみでもない、はじらいでもない、もちろん、嫌悪でもない妙な共犯の意識がX氏を襲った。あなたもですかと呼びかける駅員の肉声が耳に聞こえるような気がして、足を速めた。背中に駅員の眼が貼りついている。

気分ののらぬまま朝の仕事が終って、昼の休みに、街に出て、煙草が切れていたことを思いだし、ふと立ち寄った角の煙草屋で、おつりを差しだした老婆の左手に、白い繃帯があった。白が眩しく光って見えた。お辞儀をした白髪から眼を離して、偶然も重なるものだと呆けた顔と繃帯の白がチラチラ眼に残るまま歩きはじめたが、足は、浮遊している頼りなさだった。

4時だ。役所までとどける書類があって、外出をした。空席のある電車に乗った。3つ目の駅で、制服を着た少女たちが、4人、5人と白い歯を覗かせて、乗り込んで来た。X氏の前に坐って、黄色い声をあげて、身体をのけぞらせ、笑い転げている。一番端に坐った少女の、伏し目がちで、黙っている左手に白い繃帯があった。硬い身体の線が痛いほどで、緊張がそのまま少女を1本の棒に変えていた。

おかしなものだ。いつもと同じリズムで、生活の流れもほとんど変わらないのに、今日は、3人

も、手に繃帯をしている人と会ってしまった。もちろん、こんなことは、記憶にもない。生まれて、はじめての経験だ。X氏は考え込んでしまった。もっとも現実的で、簡単な答えは、偶然の重なりということだろう。単なる確率の問題という訳だ。1000万人以上の人間たちが歩いている都市だ。こんなことがあっても不思議ではない。ただその確率が、人間の眼には偶然としてしか映らないほどに低いだけだろう。都市生活者たちのなかから、手に繃帯をしている数を調べあげ、その人たちが1日に動く軌跡を洗いだし、足どりが重なる確率をはじきだせば、値がでるとでも言えるだろうか。よくわからない。

X氏の10年間の都市生活から判断すれば、それは偶然と呼ばれることになる。しかし、何年も会っていなかった友人と、偶然に出会ったという現象と比べれば、やはり、単なる偶然ではすまされない気分になる。

X氏は考えた。

眼は必要なものしか見ない。そうだ。X氏には、どういう訳か、白い繃帯をまいた左手が必要だったのだ。心の深いところで、それを求めている。今まで、X氏には、白い繃帯をまいた左手が必要ではなかったために、いつもは眼に触れていながら、意識を刺激しないために、見逃していただけなのだ。気にかけていないから、それが眼の前にあっても、見ていなかったのだ。電車から見る風景がそうだ。毎日毎日見ているはずだが、他人に訊かれて、赤いレンガ壁の家はどこにあった